



TITLE:

京大広報 号外 2

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外 2. 京大広報 1997, 9704g2: 229-242

ISSUE DATE:

1997-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209237>

RIGHT:



京大広報

号外

1997. 4

目次

〈入学式〉

学部入学式における総長のことば230

大学院入学式における総長のことば233

〈大学の動き〉

平成9年度学部入学式236

平成9年度大学院入学式236

名誉教授称号授与式237

平成9年度入学者選抜学力試験の結果239

〈医療技術短期大学部の動き〉

平成9年度医療技術短期大学部入学式240

医療技術短期大学部名誉教授称号授与式240

平成9年度医療技術短期大学部入学者
選抜試験の結果241

〈お知らせ〉

平成9年京都大学総合博物館

春季企画展の開催242



入学式

学部入学式における総長のことば

平成9年4月11日

総長 井村 裕 夫

本日は来賓の諸先生をお迎えして、部局長、教職員の出席のもと、平成9年度入学式を挙行し、新入生2,980名、再入学または編入学者46名、計3,026名の皆さんを京都大学へ迎え入れることができましたことを、心から嬉しく思っています。初志を貫徹して京都大学入学の栄冠を得られた皆さんに、心からお祝いの言葉を申し上げます。おめでとうございます。

皆さんが京都大学に入学できたのは、強い意志、たゆまぬ努力と、すぐれた能力の結果であります。そのことを皆さんは誇りに思っておりでありましょう。しかし入学試験で測ることができるのは、人間の知的能力の一部に過ぎません。人間には様々な知的能力があり、皆さんの能力の多くはまだ未知数であります。今後、そうした様々な能力を自ら開発してほしいと思います。いま一つ大切なことは知的能力にすぐれたものが、人生の成功者になるとは限らないことでもあります。最近知能指数IQではなくて、こころの知能指数EQという言葉がブームになっていますが、人間には豊かな感性、強い意志、温かい人間性なども必要であり、それなくして良い人間関係を築くことはできません。これからの皆さんに、人間的な成熟が求められる所以であります。

さて京都大学は1897年（明治30年）に創立されましたので、本年創立百周年を迎えることになります。皆さんは第101期生という、記念すべき年の入学生であります。京都大学の第2の世紀を切り開く開拓者として、私は皆さんの将来の活躍に期待するところ大変大きいものがありますので、本日は京都大学の創立の経緯と、私が感じている京都大学の特色について述べてみたいと思います。

1886年（明治19年）、内閣制度が確立した翌年に帝国大学令が定められ、東京大学と工部大学校、法学校等を合わせて帝国大学（現在の東京大学）が発足しました。その6年後の1892年（明治25年）自由党の長谷川泰議員らは「関西ニ帝国大学ヲ新設スル建議案」を帝国議会に提出しました。その中で長谷川議員は、「東京に一つ大学があるだけでは競争者がなく、教員は退嬰的となり、学生も努力を怠って

学力が薄弱となる。そこで東京のほかにもう一つ大学を作るべきである」という意味のことを述べています。この建議案は、日清戦争の直前で国際情勢が風雲急を告げていたため日の目を見ませんでした。戦争終了後急速に具体化し、1895年（明治28年）には予算案が提出されました。当時京都には大学予備門に相当する第三高等学校が存在したこともあって、大学設立の地として京都が選ばれました。時の文部大臣西園寺公望は京都の出身でありましたので、この新しい大学への思い入れも特別で、自ら面接を行い教授の人選にあたったと言われています。西園寺文相の京都帝国大学への期待には、「政治の中心から離れた京都の地に自由で新鮮な、そして本当に真理を探求し学問を研究する学府としての大学をつくろう」という意図がこめられていたと言われています。

1897年（明治30年）、最初に設置された理工科大学（現代風に言えば理工学部）の第1期生、53名の入学者宣誓式で、初代総長木下廣次が行った告辞は、その後の京都帝国大学（以下京都大学と呼ぶ）の特色を理解する上で注目すべき内容を含んでいます。木下総長は京都大学が発足するまでの経緯を述べた後、京都大学は東京大学の分校でも、小規模な形のものでもなく、固有の存在であり、従って固有の特性を具えねばならないことをまず指摘しています。そのため学年制をとっていた東京大学より規則を自由にし、各人の能力に応じ3～6年の間に課程を終えればよいという、科目制（現在の単位制）の制度を導入したことを述べています。そして大学生は自重自敬、自主独立の精神を持つべきこと、また教育にあたっては細大注入主義を取らず、自発自得の誘導に努めたいという趣旨の訓示をしています。この木下総長の告辞の内容は、その後の京都大学の学風とよく一致するものであります。

京都大学の創立に参加した教授の多くは、東京大学の出身でありましたが、当時めざましく学問が発展しつつあったドイツに留学し、教育と研究を一体化したドイツのアカデミズムを新設の京都大学に導入しようとしていました。法科大学（法学部）の教授となった高根義人は、1902年（明治35年）「大学の目的」「大学制度管見」という二つの論文を発表し、新生京都大学の教育方針について次のような見解を

述べています。すなわち、欧米各国の大学を見た場合、フランス型とドイツ型があり、フランス型は「専門教育を授け、実用的人間を養成する」ところであるが、ドイツ型は学問そのものの養成所であって、「学問の研究と学問の教授の二目的を併有するところである」と述べて、京都大学は後者を指すべきであるとしています。たしかに当時のドイツの大学では、知識を習得することが目的ではなく、自立的な思考を育て、自立的な探求心を養うことをめざしていました。京都大学、とくに高根義人教授の属していた法科大学では、研究と教育の一致を理想としたフンボルトの理念に基づいて、ゼミナールや卒論が導入されるなど、東京大学とは異った教育方法が採られました。この方法は当時の社会情勢の中では、とくに文官高等試験（現在の国家公務員採用試験Ⅰ種）の合格率の面では必ずしも成功せず、高根教授も辞職し、教育の方法も変化せざるを得ませんでした。しかしこの法科大学の試みは京都大学の学風が生まれる上に、大きく影響したと私は考えています。

このように京都大学は東京大学の競争者となることを運命づけられて出発しましたが、政治の中心から遠く離れていることもあって、真理を探究する学問の府となることを目指した創設当時の大学関係者の選択は適切なものであったと考えます。京都は千年の古都で日本文化の中心であり、また山紫水明の静謐な環境に恵まれていることも、学術研究には好適な条件でありました。そして京都には独立不羈の町衆の精神が横溢していたことも、新生の京都大学にとって良い環境であったと言えます。

学問にとって何よりも大切なことは、何物にもとらわれない自由な発想であります。京都大学の百年の歴史の中には様々な困難や挫折もありましたが、自由の学風を常を守る努力を続けてきました。それなればこそ創造性に富む人材を多数世に送り出し、また独創的な研究を生み出すことができたのであります。よく日本人には独創性がないと言われるが、それは決して正確ではありません。わが国の恵まれない環境の中で、多くの先達が、世界に誇りうる学問的業績を挙げて参りました。その中で京都大学の果たした役割は誠に大きいものがあり、それは自由の学風によるものと私は考えています。そして現在

の京都大学も、わが国で最も自由な大学であると言ってよいでありましょう。皆さんは其中で伸び伸びと、自分を育て上げてほしいと思います。

しかし申し上げるまでもないことですが、自由には規律が不可欠であります。学生の中には、残念ながら時として自由の意味を取り違えている人がありますが、自由とは何をしても良いということでは決してありません。自分の自由を尊重することは、他者の自由を尊重することと両立しなければなりません。この相互の自由の尊重は、社会あるいは人間の集団に、自発的な規律の形成を促すことになります。すなわち個としての自らを厳しく律する規律があってこそ、社会や集団の真の自由は得られるのであります。それには決して人に迷惑をかけず、また自らの人生も大切にするという覚悟が求められますし、また自らの行為に対して責任を負わねばならないことも当然であります。自己規制のない自由は放縦であり、自己責任をとらない自由は甘えであることを十分自覚してください。福沢諭吉は有名な『学問のすすめ』の中で「自由と我儘との界は、他人の妨げをなすとなさざるの間にあり」とし、更に「独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なきを言う」と述べていますが、独立の心があって初めて自由は得られるのであります。

私が大学生活の中で皆さんにしてほしいと望むことが二つあります。その一つは何と言っても、よく学んでほしいということです。もう少し詳しく言えば、ひとりで学ぶことを、また考えることを学んでほしいという希望であります。これから始まる大学の講義にもカリキュラムはあり、それに従って学ぶことになります。興味の持てない、あるいは苦痛になる科目もあるでありましょう。しかし先生から教えられ、皆で学んで試験を通ることは、最も効率よく知識を得る方法であります。でもそれだけなら、大学で生活することの意味は少ないでありましょう。今まで以上に自由になる時間が多い大学では、遊んでしまえば学生時代はすぐに終わってしまいます。こうした時こそ、自分ひとりで学ぶことを、また考えることを習慣づけてほしいと思います。自分で考えるためには一定の程度の知識は必要ですが、知識は本を見ればいつでも得られるものであります。大切なことは興味を持って、あるいは何故

という疑問を持って自分で学ぶこと、自分で一生懸命考えて答えを見つけることであります。日本の高校までの教育で不足しているものは、自分で学び、自分で考える訓練であります。教えられただけの知識は弱いもので忘れやすいものであります。しかし自ら学びとった知識、考え抜いて得られた知識は、学ぶこと、考えることを楽しいと思う習慣とともに、一生持続するものであります。『論語』に「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし」という有名な言葉がありますが、考えることの大切さを教えると同時に、先人に学ぶことの重要さを示したものであります。

皆さんの中には自分の進路をすでに決定し、終生学問を続けたいという希望の人もあれば、また大学を卒業すれば社会へ出て働きたいと考えている人もあるででしょう。しかしそれ以上に多くの人が、まだ自分の進路を決めていないことと思います。たとえ就職希望の人達でも、私は大学生活を通じて学問の面白さの一端に触れてほしいと願っています。学問は未知の世界に対する好奇心に導かれて、人類が長い期間をかけて築き上げてきた血と汗の結晶であり、如何なる権力も、また自然の力も滅することのできない人類の貴重な資産であります。それは常に無限のフロンティアを持ち、汲めども尽きせぬ知的興奮を起こしてくれる泉であります。大学こそ、多くの先達や友人との交流を通して知の世界の楽しさと厳しさを学ぶことのできる最適の場所であります。

就職希望の学生の中には、大学で勉強したことは社会に出てから役に立たないから、学生時代は遊んだ方がよいという意見を持つ人があります。また経営者の中にも、そのように考えている人があります。しかし、それは誤りであります。大学で得た知識の中には、実社会で役に立たないものもありましょう。しかし、大学は単に知識を獲得するだけの場ではありません。それはひとりで学ぶことを、考えることを学ぶところでもあります。学生時代に学ぶ習慣、考える習慣を身につければ、社会へ出て必ず役立つででしょう。社会へ出れば、自分で考え、そして自分で責任を負って決断しなければなりません。とくに皆さんが活躍するであろう21世紀は知識や情報が大きい価値を生む社会、技術革新が一層激しくな

る社会となるででしょう。そのため人は生涯学び続けることが必要となります。最近では企業もまた、出来上がったシステムや言われたことに柔順に従うだけの、いわゆる「透明な人材」では、創造的な企業活動はできないと考えるようになってきました。全国一斉に一定の時期に就職の選考を受けるという従来の制度が本年から廃止されたのも、1年を通じて必要な人材を求めようとする企業の態度の現われであります。実社会もまたよく学び、考えぬく力を持った人材を求める方向に変わりつつあります。その学び続ける方法を、習慣を、大学時代に自分のものにしておくことが何よりも大切であります。そのためには、京都大学は大変恵まれた環境であります。かつてさまざまな分野で独創的な学問を生み出した京都大学には、現在も自ら考え、自ら学ぶ伝統が息づいています。皆さんが積極的になれば、先生や先輩から大変多くのことを学びとれるはずであります。

私が希望する第二のことは、広い視野と豊かな人間性を育ててほしいということであります。学生時代こそ文学や芸術に親しみ、またスポーツやその他のクラブ活動を通じて友達や先輩との心の交流を深めることができる時であります。それによって瑞々しい感性を、温かい人間性を育てることができるででしょう。また興味を狭い日本国内にしぼることなく、広い世界を見て様々な国の人々と接する機会を作ってほしいと思います。京都大学では本年から、学部学生短期国際交流プログラム（Kyoto University International Education Program: KUINEP）を発足させます。これは外国の大学から学生を20人招いて、1年間英語で講義をし、日本人学生とともに学んでもらうプログラムであり、すでにアメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなどの各国の大学から20名を超える学生が応募してきています。これと同時に京都大学では、学生交流協定を結んだこれらの大学に、20名の京都大学学生を1年間交換で送り出す制度を始めます。こうした機会を積極的に利用し、外国の人が何を考え、どのように行動をするか、学んで下さい。現在世界は国境が見えにくい時代、人、物、金融、情報が国境を越えて駆けめぐる時代になっています。皆さんが実社会で活躍する次の世紀には、そうした傾向は更に顕著になるででしょう。

このような時代にあっては、世界の人々に共感できる感性、様々な変化に対応できる能力、そして世界の人々が理解できるよう自らの考えを述べる能力が、国際社会にあって、不可欠の要素となります。日本人であるだけでなく、地球人としての広い素養と人間としての深さが求められる時代であります。

大学は、例えて言えば広場のようなものであります。今日までの皆さんは、定められたコースに従って狭い道をひたすら歩み、大学という広場へやってきました。これからはどちらを向いて歩くか、自ら

決めねばなりません。広場には先生、先輩、友人など様々な人がいます。知の泉もあれば、プレイ・グラウンドもあります。そうした中で過ごす4年間は、極めて限られた短い時間ではありますが、様々な出会いを通じて人生の方向を決める重要な時期であります。また人生で最も大きく成長できる、あるいは変わりうる可能性のある大切な時期でもあります。京都大学という人生の広場における皆さんの生活が、豊かなものになることを祈って、私の式辞と致します。

大学院入学式における総長のことば

平成9年4月11日

総長 井村 裕 夫

本日ここに各研究科長、教職員の出席のもと、平成9年度大学入学式を挙行し、修士課程1,893名、博士後期課程869名、計2,762名のすぐれた皆さんを京都大学に受け入れることができましたことは、大学として誠に喜びとするところであります。入学試験を突破し、今新しい希望を胸に入学して来られた皆さんに、心からのお慶びを申し上げます。

これから皆さんは大学院において修士課程の場合には2年、博士後期課程の場合には3年、医学研究科では4年、5年一貫制の専攻では5年の間、勉強することになります。大学院の目的は専門分野の知識を身につけることと、研究を行うことであります。従来のわが国の大学院は研究に偏重していました。そのため学位論文としてレベルの高い論文が生み出されましたが、そのかわり研究者の視野が狭く、後になって異なった領域の研究ができないという批判がありました。学問も技術も大変めざましく進歩し、それらのライフサイクルが短くなっている現在では、研究者は次々と新しい課題に挑戦しなければなりません。広い基礎知識は、そのために不可欠なものであります。セミナー、講義、講演会などあらゆる機会を通じて、積極的に自分の知識を広げる努力をして下さい。幸いにして現在は情報化時代、様々な情報が容易に入手できる時代であります。自分の研究テーマ以外の問題にも関心を持つこと、それが広い基礎知識を得る最善の方法でありましょう。

大学院のいま一つの重要な目標である研究について、少し述べてみたいと思います。研究を行うにあたっては、まず第一に計画を練り、第二に研究方法を決めてこれに習熟し、第三に研究を行い、そして最後に研究の結果を分析して論文にまとめるという四つのステップが一般的であります。もちろんこの研究の流れは常に一方向に順調に流れるわけではなく、途中で進めなくなったり、最初のデザインが誤っていて訂正する必要が出たり、再現性のある結果が得られなかったり、様々な障害がつきものであります。それらを乗り越えて進むところに、研究者は苦しみと喜びを見出すのであります。

本日は研究に関連して、二つのことについてお話ししたいと思います。その一つは最近論文が発表されたクローン羊の研究であります。この研究は新聞にも大きく取り上げられ、倫理問題にまで発展したため、皆さんもよく御存知のことと思います。イギリスのRoslin研究所のWilmutらは、ヒツジの乳腺の細胞から核を取り出し、これを核を抜き取ったヒツジの受精卵に挿入してこの細胞を子宮に戻して生きたヒツジの子を得ることに成功しました。この仔羊は遺伝的に見ると、乳腺の細胞を取った個体と全く同じであり、いわゆるクローン羊であります。

生殖細胞でなくて体細胞から新しい個体を得る実験は、カエルでは大分前に成功していました。しかしほとんどの研究者は、哺乳類で体細胞からクローン動物を作ることとは無理と考えていました。それは受精卵は全能の分化能を持った細胞であります、発生の過程で分化した体細胞になると大部分の遺伝

子は抑制され、一部の遺伝子のみが働く状態となります。例えば乳腺細胞ですと、乳汁の産生に必要な遺伝子など必要な遺伝子が働き、一方不必要な遺伝子は非可逆的に抑制されると考えられていました。従ってこうした分化した細胞は再び全能の細胞になることはあり得ないというのが学界の定説でありました。そして「とかげ」や「いもり」の尾や肢を切っても再生するのに、哺乳動物では肢の再生が見られないのは、細胞がより高度に分化しているためと考えられたのであります。

Wilmurらはある目的から、クローン羊を作りたいと考え勇敢にもこの定説に挑戦しました。ある細胞の核を脱核した受精卵に移植する場合の問題点は、核と細胞の細胞周期が一致せず、そのため移植した核がDNA複製をしても染色体の凝縮がうまく進まず、異数体（非正常倍数体）になってしまうことが大きな問題でありました。Wilmurらはこの問題を、細胞を血清の少ない培地で培養することによって細胞周期をG₀期にすることによって解決しました。それによってDNA複製が細胞周期と同調し、染色体異常が少なくなったのであります。もう一つの成功の理由として、G₀期の核の方が転写因子などの因子が核に入りやすかったという可能性が考えられます。

Wilmurらの研究の成功は、私達にいくつかのことを教えてくれました。その一つは学界の定説であっても、それが完全に証明されたものでない限り、疑ってみるべきであること、ドグマに無条件に従ってはならないということでありました。このことは研究の第一の段階、計画を考えるときに重要であります。第二に、インタビューで彼は300回ほど失敗をしたと述べていました。普通の人なら諦めてしまうところであろうと思いますが、この粘りが彼等を成功に導いたと考えられます。研究の第三のステップ、実施にあたっては“根”が不可欠の要素であります。そして第三に、これは実利的な理由からでありましたが、結果としてマウスでなくヒツジを使ったところに幸運があったと思われます。それはヒツジでは遺伝子の転写が8～16細胞に分裂するまで起こらないが、マウスでは2細胞で起こるからです。16細胞までの間に、核のプログラムの修正が行われ、全能性を回復した可能性を指摘する人もあり、研究には

“運”も必要であることを示すものでありましょう。クローン動物の研究は、新たな生命倫理の問題を私達に提起しました。それに対しては冷静、かつ慎重に対処すべきであります。クローン動物の研究は、実利的な面のみでなく生物の発生、老化、発癌などのメカニズムの研究に大きい貢献をすると考えるからであります。

ここで少し話題を変えます。本年はちょうど京都大学が創立百周年を迎える年でありますので、それに因んだ話をしたいと思います。それは「日本人に独創性はあるのか」という疑問を問いつけた人、京都大学文科大学の初代学長（現在の文学部長）狩野亨吉のことです。狩野亨吉は第一高等学校校長として高い評価を受け、新設の京都大学文科大学長に就任しましたが、健康上の理由もあって2年で職を辞し、その後は2度と官職に就かず、市井に埋もれて生涯を送った人です。しかし学歴にこだわらず、すぐれた人材を京都大学の文学部に集めて、後の隆盛の基礎を作った功績は大変大きいものがあると私は考えています。

狩野亨吉は最初数学を、次いで哲学を学んだ哲学者でありました。しかし発表論文は少なく、僅かに狩野亨吉遺文集が1冊残されているのみであります。狩野亨吉は古書を愛して蒐集し、江戸時代のユニークな学者を発掘しました。安藤昌益、志筑忠雄などです。なかでも安藤昌益は明治32年狩野亨吉によって発見されるまでは、ほとんど知られていなかった江戸中期の思想家であります。秋田の大館に生まれ、江戸で医師をして生涯を送った安藤昌益は全く独学で学問をし、ひそかに『自然真営道』という本を書き残しました。彼の思想は徹底した相対主義に基づいており、人はすべて平等であるから、ひとしく農業労働に従事し、男女は対等に一夫一婦の関係を結ぶのが人間本来の姿であるとし、こうした社会を「自然の世」と呼んでいます。そして現実の社会は「法世」、こしらえた世であるとして、当時の封建的な身分社会はもちろん、法世を作る上に大きい役割を果たした儒教、仏教まで厳しく批判しました。少し単純な平等主義、そして農本共産主義とも言うべき思想であります。徳川中期という封建社会の中で、独力で自然の本質にまで踏み込んだ独特の思想体系を作り上げた昌益の創造力は、素晴

らしいものであると思われます。狩野亨吉が昌益に傾倒して、彼としては最も長い論文を書いたのも、昌益の独創性を高く評価したためでありましょう。

やはり狩野亨吉によって見出された志筑忠雄は、長崎の人で通訳を勤め、翻訳を通じて自然科学に興味を持ちました。ニュートンの力学を初めてわが国に導入しただけでなく、太陽系の起源についてカントやラプラスに先だって、同様な星気説を発表しました。その説にはやや神秘的なところもありますが、当時としては画期的な業績であり、独学でこのような理論を発展させた志筑忠雄の独創性を、狩野亨吉は高く評価したものと考えます。

少し長く狩野亨吉をめぐる話をしましたが、私が申し上げたいことは日本人にも独創性があるということでもあります。ただ明治以来欧米の学問の導入に忙しく、自らの創造性を育てる努力をしなかったのではないかと考えます。すなわち学問とは、欧米

のものを導入し、それを日本流に翻案することであるという誤った常識のようなものが、いつの間にか出来上がったのではないのでしょうか。欧米とわが国の学問の差が大きい時代には、それも止むを得なかったことでありましょう。しかしキャッチアップをほぼ終わった現在、私どもは眠らせてきた日本人の独創性を揺り起こすべきときであります。そのためには定説に無条件に従うことなく、思い切った挑戦をすること、予想外の結果が得られたらそれを大切にし、十分考えることが必要であります。また研究がうまく進まなくても決して焦ることなく、根気よく頑張ってください。努力をする人にだけ、幸運の女神は微笑むであります。

皆さんの大学院における生活が、実り多い、意義あるものになることを祈念して、私の式辞と致します。



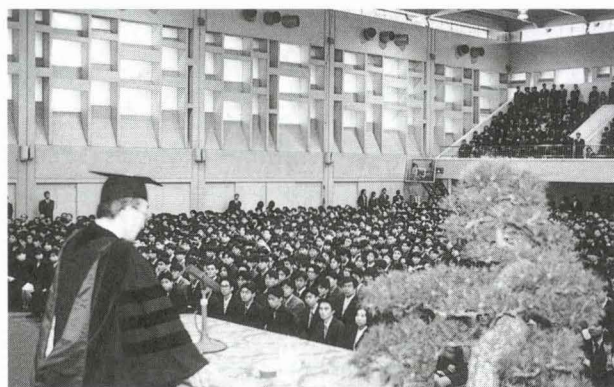
大学の動き

平成9年度学部入学式

4月11日（金）午前10時から、平成9年度学部入学式が、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱（京都大学交響楽団および京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」があり、午前10時40分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。



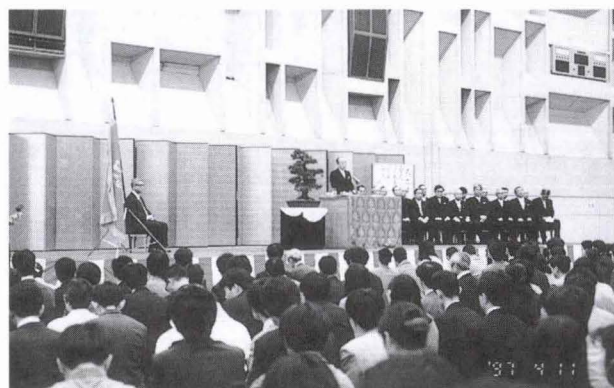
学部	募集人員	一 入 学 者	外国学校出身者 のための選考に よる入学者	計	外国人留学生数			第3学年 編入学者	再 入 学 者	計	合 計
					国費	私費	計				
総合人間学部	130	130		130	1		1	1		1	132
文 学 部	220	224		224				3		3	227
教 育 学 部	60	63		63				6		6	69
法 学 部	400	390	16	406	2		2	13		13	421
経 済 学 部	240	234	10	244	3	8	11	* 14		14	269
理 学 部	326	326		326							326
医 学 部	100	103		103							103
薬 学 部	80	84		84							84
工 学 部	1,050	1,050		1,050	6	8	14	8		8	1,072
農 学 部	315	321		321		1	1		1	1	323
合 計	2,921	2,925	26	2,951	12	17	29	45	1	46	3,026

〈注〉*私費留学生1名を含む。

平成9年度大学院入学式

4月11日（金）午後3時から、平成9年度大学院入学式が、名誉教授をはじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱（京都大学交響楽団および京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」があり、午後3時25分に終了した。今年度の新入生数は、次のとおりである。



研究科	修士課程				博士後期課程									
	入学者	外国人留学生		合計	編入学者	外国人留学生		再入学者	小計	進学者	外国人留学生		小計	合計
		国費	私費			国費	私費				国費	私費		
文学研究科	人 112	人 1	人 2	人 115	人 6	人	人	人	人 6	人 52	人 1	人 2	人 55	人 61
教育学研究科	36	1	1	38	1				1	21		2	23	24
法学研究科	52		4	56	1			2	3	18	2	5	25	28
経済学研究科	53	1	25	79	8	1	1		10	24		7	31	41
理学研究科	286	3	2	291	20	5	1	*2	28	145	2	1	148	176
薬学研究科	73	2	2	77	2		1		3	17			17	20
工学研究科	707	9	23	739	37	7	10		54	85	3	6	94	148
農学研究科	255	5	6	266	12		6		18	74	8	3	85	103
人間・環境学 研究科	114	4	4	122	11	4	2		17	59	3		62	79
エネルギー 科学研究科	108		2	110	10	1			11	4		3	7	18
合 計	1,796	26	71	1,893	108	18	21	4	151	499	19	29	547	698

〈注〉* 転入学者で国費留学生1名を含む

研究科	博士課程				
	入学者	外国人留学生		転入学者	合 計
		国費	私費		
医学研究科	人 148	人 6	人 10	人	人 164

研究科	一貫制博士課程				
	入学者	外国人留学生		転入学者	合 計
		国費	私費		
人間・環境学研究科 (アフリカ地域研究専攻)	人 7	人	人	人	人 7

名誉教授称号授与式

4月7日（月）午前11時から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の出席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長のあいさつ」があって、午前11時40分終了した。

称号を授与された方は、次の68名である。



(敬称略)

(氏 名)	(推 薦 部 局)	(氏 名)	(推 薦 部 局)
高 安 正 夫	(医 学 部)	沖 野 教 郎	(大 学 院 工 学 研 究 科)
大 澤 濟	(霊 長 類 研 究 所)	丸 山 利 輔	(農 学 部)
堀 江 悟 郎	(工 学 部)	永 田 英 正	(大 学 院 文 学 研 究 科)
森 口 親 司	(経 済 研 究 所)	森 田 司 郎	(大 学 院 工 学 研 究 科)
森 本 信 男	(理 学 部)	糸 川 嘉 則	(大 学 院 医 学 研 究 科)
河 内 良 弘	(文 学 部)	八 木 保	(総 合 人 間 学 部)
藤 多 哲 朗	(薬 学 部)	北 村 貞 太 郎	(農 学 部)
木 村 敏	(医 学 部)	藤 澤 久 雄	(大 学 院 理 学 研 究 科)
森 岡 茂 樹	(工 学 部)	竹 市 明 弘	(大 学 院 人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)
福 地 崇 生	(経 済 研 究 所)	野 田 宣 雄	(大 学 院 法 学 研 究 科)
池 田 正 之	(大 学 院 医 学 研 究 科)	矢 島 脩 三	(大 学 院 工 学 研 究 科)
牧 田 貢	(大 学 院 理 学 研 究 科)	浅 田 浩 二	(食 糧 科 学 研 究 所)
今 西 幸 男	(大 学 院 工 学 研 究 科)	鎮 西 清 高	(大 学 院 理 学 研 究 科)
小 倉 久 直	(大 学 院 工 学 研 究 科)	坂 野 登	(教 育 学 部)
山 口 裕	(総 合 人 間 学 部)	佐 藤 康 彦	(総 合 人 間 学 部)
高 津 春 久	(総 合 人 間 学 部)	高 棹 琢 馬	(大 学 院 工 学 研 究 科)
佐 々 宏 一	(大 学 院 工 学 研 究 科)	梅 原 郁	(人 文 科 学 研 究 所)
大 山 喬 平	(大 学 院 文 学 研 究 科)	久 世 文 幸	(胸 部 疾 患 研 究 所)
高 木 英 明	(教 育 学 部)	伴 敏 彦	(大 学 院 医 学 研 究 科)
岡 崎 守 男	(大 学 院 工 学 研 究 科)	坂 東 尚 周	(化 学 研 究 所)
安 陪 稔	(大 学 院 工 学 研 究 科)	山 崎 泰 郎	(数 理 解 析 研 究 所)
内 山 俊 彦	(大 学 院 文 学 研 究 科)	谷 泰	(人 文 科 学 研 究 所)
長 岡 洋 介	(基 礎 物 理 学 研 究 所)	赤 松 映 明	(大 学 院 工 学 研 究 科)
前 田 章 夫	(大 学 院 理 学 研 究 科)	三 村 浩 史	(大 学 院 工 学 研 究 科)
村 松 久 史	(防 災 研 究 所)	渡 邊 久 義	(総 合 人 間 学 部)
池 上 惇	(経 済 学 部)	宮 嶋 孝 一 郎	(薬 学 部)
龍 田 節	(大 学 院 法 学 研 究 科)	並 河 清	(農 学 部)
岩 倉 具 忠	(大 学 院 文 学 研 究 科)	神 崎 康 一	(農 学 部)
駒 野 徹	(農 学 部)	安 本 教 傳	(食 糧 科 学 研 究 所)
中 村 恒 善	(大 学 院 工 学 研 究 科)	吉 田 忠	(総 合 人 間 学 部)
福 留 秀 雄	(大 学 院 理 学 研 究 科)	菊 池 晴 彦	(大 学 院 医 学 研 究 科)
岩 坪 五 郎	(農 学 部)	田 中 喬	(大 学 院 人 間 ・ 環 境 学 研 究 科)
森 崇 英	(大 学 院 医 学 研 究 科)	小 林 芳 正	(大 学 院 理 学 研 究 科)
光 田 寧	(防 災 研 究 所)	小 畠 啓 邦	(総 合 人 間 学 部)

なお、京都大学名誉教授称号授与規程の一部改正に伴い、平成9年3月30日以前に退職した教授にも新規程が適用されました。

平成9年度入学者選抜学力試験の結果

平成9年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は2月25日（火）・26日（水）に、後期日程試験は3月13日（木）・14日（金）に実施した。

学部別の受験者数、合格者数および入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階選 抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠 席 率 (%)	(I) 合格者数	(J) 追加合 格者数	(K) 入学者数
総 合 人 間	130人	人		人	人		人		人	人	人
前 期	55	274	5.0	269	267	4.9	2	0.7	55		
理系	55	269	4.9	261	256	4.7	5	1.9	56		130
後 期	20	420	21.0	327	198	9.9	129	39.4	20		
文 学 部	220										
前 期	190	651	3.4	651	646	3.4	5	0.8	193		224
後 期	30	467	15.6	301	138	4.6	163	54.2	31		
教 育 学 部	60										
前 期	40	194	4.9	192	189	4.7	3	1.6	43		63
後 期	20	159	8.0	159	120	6.0	39	24.5	20		
法 学 部	380										
前 期	340	982	2.9	981	963	2.8	18	1.8	345		390
後 期	40	624	15.6	500	236	5.9	264	52.8	46		
経 済 学 部	230										
前 期	160	518	3.2	518	509	3.2	9	1.7	163		
論文	50	311	6.2	250	247	4.9	3	1.2	50		234
後 期	20	466	23.3	382	210	10.5	172	45.0	27		
理 学 部	326										
前 期	294	1,035	3.5	1,013	994	3.4	19	1.9	294		326
後 期	32	1,153	36.0	1,135	754	23.6	381	33.6	32		
医 学 部	100										
前 期	90	459	5.1	457	442	4.9	15	3.3	93		103
後 期	10	308	30.8	174	96	9.6	78	44.8	11		
薬 学 部	80										
前 期	70	190	2.7	190	183	2.6	7	3.7	73		84
後 期	10	156	15.6	154	74	7.4	80	51.9	11		
工 学 部	1,050										
前 期	940	2,470	2.6	2,462	2,446	2.6	16	0.6	941	2	1,050
後 期	110	1,415	12.9	1,409	738	6.7	671	47.6	111		
農 学 部	315										
前 期	252	764	3.0	762	753	3.0	9	1.2	259		321
後 期	63	829	13.2	828	517	8.2	311	37.6	63		
小 計	2,536	8,117	3.2	8,006	7,895	3.1	111	1.4	2,565		
後 期	355	5,997	16.9	5,369	3,081	8.7	2,288	42.6	372	2	
計	2,891	14,114	4.9	13,375	10,976	3.8	2,399	17.9	2,937	2	2,925

（注） 受験者数・欠席率は最終教科のものである。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果〕

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1次選考 合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率 (%)	(I) 合格者数	(K) 入学者数
法 学 部	20以内人	60 人	3.0	43 人	30 人	1.5	13 人	30.2	16 人	16 人
経 済 学 部	10以内	25	2.5	18	15	1.5	3	16.7	10	10

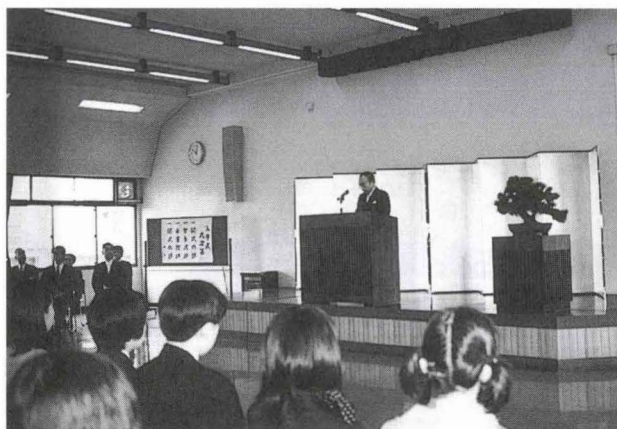
医療技術短期大学の動き

平成9年度医療技術短期大学部入学式

4月7日（月）午前10時から、平成9年度医療技術短期大学部入学式が、名誉教授をはじめ来賓の出席のもとに、本短期大学部講堂において挙行された。

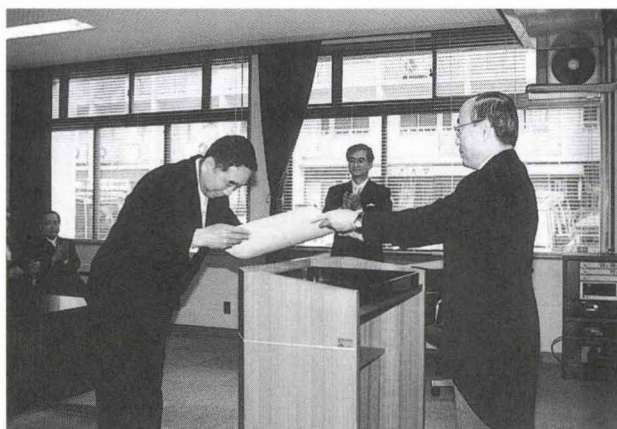
入学式は、学長式辞、来賓祝辞があつて、午前10時30分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科79名、衛生技術学科40名、理学療法学科20名、作業療法学科20名、助産学特別専攻20名の計179名であった。

医療技術短期大学部
名誉教授称号授与式

4月7日（月）午前9時30分から、医療技術短期大学部名誉教授称号授与式が、本短期大学部会議室において挙行され、川井 浩元教授に称号が授与された。

授与式は、称号授与のあと、「学長のあいさつ」があり午前9時40分終了した。



平成 9 年度医療技術短期大学部入学者選抜試験の結果

医療技術短期大学部では、平成 9 年度入学者選抜試験を 3 月 3 日（月）、3 月 4 日（火）に実施し、その合格者氏名を 3 月 13 日（木）に発表した。

受験者数および合格者数等は次のとおりである。

学 科	募 集 人 員	志 願 者 数	受 験 者 数	合 格 者 数
看 護 学 科	80 人	278 人	236 人	96 人
衛 生 技 術 学 科	40	408	347	61
理 学 療 法 学 科	20	279	245	27
作 業 療 法 学 科	20	206	170	27
計	160	1,171	998	211

お知らせ

平成9年京都大学総合博物館 春季企画展の開催

京都大学総合博物館では、下記のとおり春季企画展「王者の武装－5世紀の金工技術－」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です（職員証または学生証を呈示のこと）。

記

企画展「王者の武装－5世紀の金工技術－」

期 間 4月15日（火）～6月14日（土）

開館日時 火曜日～土曜日 9：30～16：30

（入館は閉館30分前まで、日・月・祝は休館）

場 所 総合博物館 企画・総合展示室

展示内容

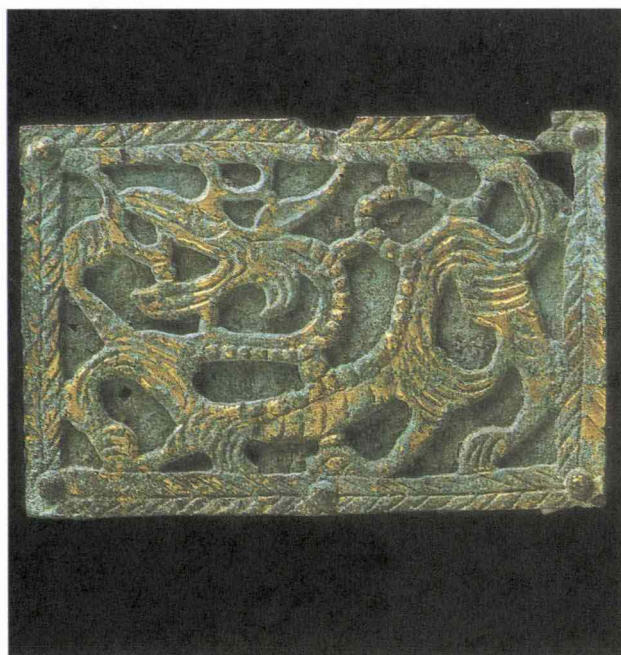
5世紀の日本は技術革新の時代であった。朝鮮半島からもたらされた新来の製品や技術が、焼き物や農具など日常用具の生産をはじめとして、当時の各分野の生産に大きな影響を与えた。そのなかでももっともめだった変化を遂げたのが、王者の所有物である武具や馬具であった。

5世紀の王者たちは鉄でできた武具をまとめて厳めしく装い、また彼らの乗った馬も、さまざまな装飾をこらした馬具で飾られていた。こうした武具や馬具を作るためには、鉄板を複雑に折り曲げて組み合わせたり、またそれらを金・銀・銅などで装飾する技術が必要であり、当時の金工技術の粋が盛り込まれていた。そのため優れた輸入品が用いられると同時に、新しい製作技術を学んで、さまざまな技術改良もおこなわれたのである。

そのように高度な技術を駆使して作られた武具や馬具などの金属製品は、王者の武力や権威を示す象徴として、王者がもっとも重視した器物であった。したがって武具や馬具は当時の技術や生産の様相を知らしめるとともに、王権のあり方を考える上でも重要な歴史資料となる。

今回の企画展では、5世紀の古墳から出土した武具・帯金具・馬具などを取り上げ、そこに認められる技術変化の様相とそうした変化があらわれる背景を描写する。

なお、博物館では同時に、常設展「日本古代文化の展開と東アジア」「日本の古文書」も開催する。



（総合博物館）